# 日向太陽の仲間と行く未来の道え

俺は悪くない世界が悪いんだ

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この作品はもう一つある話と少し違う物語。

彼の仲間達と共にあらゆる異世界を救おうとしていた。

彼はもう一人であらゆる異世界を周った。

でも、彼は一人じゃあ無いから、彼の心は傷つくことはないのかもしれない、けどそれを支えてくれる仲間が彼にはいる。

これから、彼はまたどんな方法で異世界を救うのか

愛と勇気のいやご都合主義と原作崩壊とキャラ崩壊の彼等の物語

# 目次

プロローグ的なやつと設定 ―― 1
マブラブ
一話 ―― 4
二話 ―― 14
三話 ―― 18
四話 ―― 20

# プロローグ的なやつと設定

この作品はもう一つの話のちょっとだけ違う話です。
この作品は、いろんなキャラが出てきます。
ガンダムに出てくるキャラとか、フェイトとか、フルメタとか、後はオリキャラの日向太陽が出す予定いや出す。
日向太陽は神の特典でいろんな能力や特技経験をもらった。
投影、ＳＥＥＤ、ニュータイプ、純粋のイノベーター、ついでにオリジナルのガンダムの機体を持ってあらゆる世界を回った。
ガンダム、フルメタ、マクロス、マブラヴ、ＦＧＯ、俺ガイル、等々人同士の殺しあいの世界や普通の戦争の無い日常の世界も回った。
けど彼は、ただただ彼は苦しんだ、その苦しみは誰にも分からない一人でただ苦しんでいる。
どの世界に回っても終わらない記憶があった。
それはもう一人の自分だった。
とある世界を回ってもいたらそこにはもう一人の自分がそこにはいた。
もう一人の自分いや彼も神の特典で、あらゆる異世界を回り人同士の殺しや普通の世界で日常を送っていた。
だが違うのは彼は未来の英霊になっていたクラスはアヴェンジャーだった。
彼は過去の自分を殺そうとした。
彼らは、過去と自分と未来の自分と戦った。
英霊になった彼は、自分の過去の行いを話し戦った。
その道の先にたどり着いた自分の後悔を言った。
それでも彼は、そいつを受け入れた未来の自分も同じ道を辿っても決して間違っていてもその行いが駄目でも彼は決して間違いじゃないから。
例え誰にも理解されなくても良いたとえ、その終わりの道の先にたどり着いた時何があるのかそれは分からない。
けど彼は、何億何万どれぐらいの異世界を回ったのかもはやそれす

ら忘れるぐらいだった。
彼は守護者と契約をし変わりに抑止力の復讐者となり、未来の自分と少しずつ近づいて来ていた。
彼の身体には死んだものの、亡霊いや日向太陽に殺された怨みや怒りや悲しみ哀れみあらゆる死者の亡霊の魂が取りついていた。
一生離れることの無い呪縛これは未来の自分が英霊になっても、続くその苦しみはたぶん誰にも理解されない。
それでも彼の心の風景は荒れ果てた大地に無限の剣が刺さっていた。刺さっていたけど地面じゃあなかった。
枯れた草花の所には剣に刺さった人間がいて、倒れた木々には寄り掛かって刺さっていた。
空は、粉々になった歯車に人型のロボットの手足とかが散乱して空を漂っていた。
それを見るからに異常な光景だった。
その光景を見た者は恐怖をするだろう人に刺さった剣に空は、人型ロボットが漂っているからだ。
誰よりも人一倍この重みを背負って歩いていた彼の物語がある。
と言うのがどう一つの話、この物語は愛と勇気のいや違うな愛と勇気じゃない。それは、原作崩壊とキャラ崩壊のご都合主義の彼らの物語であれ。

名前「日向太陽」
能力
ＳＥＥＤ
純粋のイノベーター
ニュータイプ
投影魔術（エミヤと同じ能力）
武術や体術ができる

神話や童話の人や武器を覚えている
他諸々
趣味
パソコン
家事等

［インフィニティフリーダム］
外見と形はダブルオークアンタで違うのがＧＮドライブが、３つ搭載され一つ目は胸部と後の二つは左右のＧＮシールドに搭載さていて、ハイパーデュートリオンエンジンとサイコフレーム搭載されている。サイコフレームは胸部と各部関節に搭載しており、マルチロックオンシステムが搭載している。
武装はＧＮソードＶが両腕に装備してえり、左右のＧＮシールドにＧＮソードビットが６基あり計１２基マウントされ追加で、ＧＮシールドの青い装甲にＧＮスーパドラグーンが８基マウントしてある。後は、両腰にＧＮビームレール砲が、二基あり、リニアスカートの代わりにファンネルが前に四基で後ろに四基装備してある。
背中にはＧＮパラエーナ収束ビーム砲が二基装備している。
後方支援機バックパックでユニバースブースターとアブソールシールドがあるが状況によって機体に付けたり外したり可能である。ユニバースブースターとドッキングするとカップリングシステムが使用できるが、あまり使うことは無いが個人でも使えるが使用した後に脳に大きな反動がくる。

# マブラブ
## 一話

ｓｉｄｅ：日向

俺が目を開けると愛機のコックピットのシートに座ってた。

「また・・・一人か・・まぁ良いか」

俺がそう言うと機体のコックピットハッチを開けるとそこはＭＳ格納庫にいた。

コックピットから出たら宇宙空間だと分かり、手すりに捕まり先の乗ってたＭＳを見ようと後ろを向くと俺の愛機だった。

それを確かめたらまた、コックピットに戻ったら居場所を確かめるため位置情報を調べるとそこソレスタラビーング号だった。

それを確かめたらコックピットを出たらソレスタラビーング号のブリッジを目指した。

ブリッジの目の前目で来たら入り口が開くと大きな空間が広がっており真ん中まで進むと、そこには人影があった。

真ん中まで進んだらその人影が見えた。

俺はその人影を見ると驚いた。

「え・・・」

その人影はガルデアのマスターで俺の友であり戦友だった。

「なん、で・・・ここにい、る」

そこには藤丸立香とその仲間のサーヴァントがいた。

「それは、日向さんが心配だからかな、だめかかな?」

そう答える藤丸は心配そうな顔をしていた。

「だって、特異点攻略の時、優先順位が自分だけ低くて何より、日向さんは自分の命を軽く見すぎです!!」

藤丸は今にも泣きそうな顔をしていた。

そうだな、そのとおりだな藤丸の言うとおり俺は戦う時や救う時は、例え無理でも自分の命を軽く見ていた。

「そうだ、な・・・藤丸の言うとおり自分の命を軽く見すぎていたな。

これからは気お付けるよ」
「でも、あんまり無茶はしないで下さいね？」
「あぁ、分かった以後気お付ける」
　俺がそう言うと藤丸の頭を撫でたら藤丸は嬉しかったのか笑っていた。
「そういや、なんでソレスタラビーング号にいるんだ俺達？」
　俺がそう言うと藤丸はコンソールは叩くとモニターに今の状況が写し出された。
「今の地球の状況です。」
　モニターに出た映像は二つの大きな目玉を持った生物が写し出された。
「これは、なんだ藤丸？」
「地球のネットワークにキラさん達がハッキングして調べた所、この生命はＢＥＴＡ呼称した地球外生命体です。」
「まさかまた、こちらの世界にやって来るとは運命は残酷だな。」
　そう言うと藤丸は驚いた様子だった。
「まさか知ってるんですか?!」
「まぁ、一応な」
「それなら良かった説明を省けるから」
「なぁ、藤丸これからはどうするんた？」
　そう藤丸に質問を問うと真剣な顔をして答えた。
「それは・・・この世界を救いたいです！」
「例え人同士の殺し会いがあってもか？」
「それでも、救いたいです！」
　藤丸は真剣な眼差しで俺を見てくる。
「分かっただが条件がある」
「なんですか？その条件は？」
「藤丸は、ここにいろ」
　藤丸は驚いた顔をした。
「サーヴァントは強いけど、個体差が在りすぎるだから、ここはキラ達や俺に任せて欲しいお願いだ！」

俺が藤丸に頭を下げて言うと藤丸は
「分かりました。私はここで太陽さん達のサポートをします。けどちゃんと生きて帰って下さい。」
「あぁ分かった、ちゃんと生きて帰って来るよ」
そう藤丸に言うとブリッジを出たら地球に降下する準備をキラ達に指示した。
「キラ!」
俺がキラの名前を呼ぶとこっちに顔を向いてくれた。
「太陽これから地球に降下するんでしょ?それなら僕達も行くよ。もうアークエンジェルに僕達の機体積込終わってるから行けるよ?後は、刹那達とミネルヴァも一緒に行くけど良い?」
そうキラが言うと俺一人で行くつもりだったけどキラにばれたら一緒行くことにした。
「分かった。俺のインフィニティーとガルスは、何処にある?」
「インフィニティーは整備中で、ガルスとアヴェンジャーはアークエンジェルに積み込んだよ」
「分かったありがとう」
そう言うとキラ達より少し早くアークエンジェルの格納庫に向かって進んだ。
少ししたら、アークエンジェル達の物資の搬入が終わるとラミアス艦長が喋ると戦艦が動いて地球に向かった。

side：藤丸
日向さんは、いつも無茶ばっかしてた。
私をサーヴァントの攻撃から庇ってくれたと後、そのまま傷だらけの常態で戦って不器用でいつも自分の命を軽く見ていて、誰にでも優

しく接してくれる日向さんが誰かのために地球に降下する様子を見ていた。
「良いのかい行かなくて良くて？」
私が後ろを向くとブライト艦長がいた。
「良いんです。私は、日向さん達を信じるから良いです」
私は、ブライトさんに笑顔を向けたらブライトさんも笑った

ｓｉｄｅ：日向

俺は、地球に降下する前に日本の征夷大将軍の
煌武院悠陽にメッセージと一部の技術データを送ったら数時間後に連絡が帰って来たらラミアス艦長に報告するため部屋から出でアークエンジェルのブリッジに向かった。
ブリッジに行くためのエレベーターの扉が開いたらエレベーターに乗って上に上がったら、扉が開いたらラミアス艦長の所まで飛んで連絡の報告をしたら、地球に降下する準備をして大気圏にアークエンジェル、ミネルヴァ、プトレマイオス改２が同時に降下したら日本の帝国目指して雲の上を航行途中、レーダー係の人が
「レーダーに戦闘の反応有り！」
そう言うとラミアス艦長は
「場所はどこなの?!」
「え～と我々の真下です！」
「なんですて！どことの戦闘なの?!」
そこにはキラ達とミネルヴァのタリア艦長とプトレマイオス改２のスメラギ艦長が通信回線を繋いでいた。
「ラミアス艦長多分どこかの国がＢＥＴＡとの戦闘だと思う」

俺がラミアス艦長にそう言った。
「だからＭＳの出撃許可を？」
ラミアス艦長にモビルスーツの出撃許可を求めたらアークエンジェルが戦闘に参加してミネルヴァとプトレマイオス改２を先に行かせた。
「なら、アークエンジェルは戦闘が終わり次第行きます。だから先に向かって下さい。」
「ラミアス艦長!?」
ラミアス艦長がそう言ったら通信回線を切って戦闘をしてる所に向かった。
俺は、すぐさまブリッジから出たら更衣室に行きオーブのパイロットスーツに着替えたら、格納庫まで走った。
格納庫にたどり着いたら自分の違う愛機に乗ったら、コックピットを閉めてＯＳを起動したら計器機が写し出され、モニターが起動したら格納庫が写し出された。
カタパルトハッチに向かって機体の固定具が動いた。
カタパルトに着いたら正面のハッチが開いたら太陽の光が機体を照らした。
リニアカタパルトに機体を固定したらミリアリアが
「フリーダムガルス、リニアカタパルト固定完了、発進どうぞ！」
「日向太陽、ガルス出る！」
カタパルトが動いてスキージャンプの要領で飛んだら、背中のウィングをハイマットモードにしたらスラスターを噴射して進んだ。
後からフリーダム、ジャスティス、暁が来た。
フリーダが通信回線を繋いで来た。
「太陽これから戦う相手ってＢＥＴＡだよね？」
「そうだがそれがどうした？」
「それは・・・」
「元々俺達は、人間同士の戦争をしてきたからこうゆう相手をするのは初めてだからなキラ？」
通信にアスランが入って来た。

「うん、なんだかこういわかんを感じるからだよアスラン」
「そりゃそうだろ生きていた中でこんな化け物と戦うことなかったからな」
　またもや通信にムウが入って来た。
「あぁ、だが気お付けろＢＥＴＡは圧倒的な物量で来るＭＳは、良いけどこの世界の人達が乗る戦術機は違うけらな」
　そこでムウが
「おっとお喋りは、ここまでのようだもうすぐ戦闘エリアに着くぞ」
　ムウがそう言うとモニターに今の戦闘状況が見えた。
「こんな・・・酷い！」
　キラがそう言った。
　ＢＥＴＡに追い込まれる戦術機が破壊される所を見た。
「キラ、アスラン、ムウ助けるぞ！」
「「おう！」」
　そう言うとキラ、アスラン、ムウは散開してＢＥＴＡを撃破しに行った。
　俺は、機体を加速させ要撃級が戦術機に攻撃する一瞬の瞬間に、レール砲を後ろ腰にスライドしたら両手に持ってるビームライフルを左右の腰にマウントしたら、右肩部のウェポンラックから二つ折りした対艦刀を右手に持ったら、上段から振り下ろすと同時に対艦刀を展開して、要撃級の前腕を根本から切り裂いたら、その切った前腕を左手で掴んで横からフルスイングして二つの頭を潰した。
　俺は衛士の無事を確認したら、すぐにＢＥＴＡを正面から突っ込んだ。
　そしたら先の戦術機から通信が入った。
「だめ!!やられる!!」
　声からしたら若い女性衛士の声だった。
　右手に持った対艦刀を携えて真っ向から切り捨てる。
　そしたら突撃級の群れが向かって来るのが見えたら左肩部のウェポンラックにある高エネルギー砲長射ビーム砲を展開して左手でグリップを握ると突撃級に向けて発射した。

残ったＢＥＴＡは、アスランとムウはビームサーベルをハルバート状態にしたらＢＥＴＡどもを切り刻んで進み、キラはビームライフルとレール砲とカリゥウド砲そしてマルチロックを使ってＢＥＴＡを撃破していた。
要塞級がこちらに向かって来たから迎撃に向かってスラスターを噴射して複数の要塞級に向かった。
対艦刀で複数の要塞級の頭を切り裂いたり、高エネルギー長射砲ビーム砲で戦車級、突撃級を一掃した。
そのまま対艦刀や高エネルギー長射砲ビーム砲で敵を潰していく。その時、光線級と重光線級が一斉にレーザーを照射をしようとしていた。
ここでまたもや女性衛士の通信が入った。
「え！・レーザー警報!!・駄目！・逃げて?!」
ここで痺れを切らしたのか女性衛士の通信に答えてしまった。
「大丈夫だ。安心しろ」
女性衛士にそう答えたら、光線級、重光線級のレーザーが飛んで来た。
それを機体を巧みに動かしレーザーを避け続けたら横にバレルロールをした時、ウィングの羽で隠してたパラエーナ収縮砲とカリュウド砲と高エネルギー長射砲ビーム砲で光線級、重光線級を全滅させた。
ほとんどのＢＥＴＡを殲滅したら、その場を後にしてアークエンジェルに向かって飛んだ。
アークエンジェルに戻ったら、コックピットハッチを開いて更衣室に向かった。
更衣室で着替えたら、日本に向けてアークエンジェルが進んだ。
やっと日本に着いたらミネルヴァ達がいる所にアークエンジェルを向かわした。
会談場所まで来るとそこには、ミネルヴァとプトレマイオス改２が止まっているのが見えたらそこにアークエンジェルも地上に降ろしたら、タリア艦長達と日本の帝国の征夷大将軍と会談をするため艦か

ら降りると、そこには悠陽達が目の前に現れた。

ｓｉｄｅ：悠陽

私の目の前に立つ人物、日向太陽とゆう御方。

彼の姿を見て私は見つめていた。

その佇まいは堂々とし、優しそうな目。

ですが：その優しそうな瞳、その瞳の中には誰も理解出来ない程の悲しみ哀れみが見えた。

何故その洋梨瞳をしてるのか、私は気になってしまいました。

ｓｉｄｅ：日向

とうとう征夷大将軍との会談が始まった。

会談のほうはラミアス艦長達に任せていたので会談の話を聞いていた。

それから数時間後にやっと会談が終わった。

会談でした話内容は、征夷大将軍直属の独立部隊「オーブ」が出来た。階級は各々が持ってる今の階級になったのとアークエンジェルとミネルヴァとプトレマイオス改ニは征夷大将軍の護衛艦にした。

後は、モビルスーツの指導と戦術機の開発を手伝うことになった。

特に俺なんて衛士訓練学校に行かされる始末で転入の手続きはしてくれたがどうしたもんか。
まぁ、学校だ授業なんて幾らでもサボれるそう思っていると誰かが声をかけてきた。
他の皆は自分の艦に戻った行ったけど俺は、屋敷の縁側に座り空を見ていた。
この時代は空はＢＥＴＡのせいで制空権を無くし今は大空を飛ぶことが出来ないだからか
「太陽様、今お暇ですか？」
「あぁ、いま暇してる所だ。でなんのようだ殿下？」
顔を後ろに向くと煌武院悠陽の寝巻き姿が見えた。
「殿下なんて二人だけの時は、悠陽と呼んで下さい太陽様」
「んで本当なんのようだ悠陽？」
「いや、まだここにいらしていたので声をお掛けしだけです」
悠陽がそう言ったら俺の隣に来て縁側に座った。
その時悠陽は少し頬を赤くしていた。
「太陽さんは大空を飛ぶ時、怖く無いんですか？だってＢＥＴＡの中光線を撃ってくるＢＥＴＡがいる中でと空を飛び続けますか？」
「そうだな俺は、ここの世界とは別の戦争の中で光線が飛び交う中を飛んで戦って来たから、レーザー級の光線は俺から見たら生温いとおもうな」
そう言うて悠陽から離れようとしてたら服の裾を力一杯に掴んだ。
「おい良いから離せ！」
「いやです一緒寝て下さい!!」
悠陽は俺の服の裾を掴んだまま離そうとしなかった。
「無理絶対嫌だ！だってお前の近衛に殺されるから絶対に嫌だ！」
「むぅならしょうがないですね。今日は潔く引きます。
ですが諦めませんからでは、御休みなさい」
悠陽がそう言うと自分の部屋に向かっていた。
そして数週間後、そして転入初日
今、帝国近衛士官学校の教室前に来たら先に教官が教室に入った

ら、少ししたら呼ばれた。
「しっつれいしま～す」
「今日転入して来た、日向太陽です」
「席は、自由だ。どこでも良いから席に着け」
久しぶりに授業をでも受けるかと思ったら、予想通り今日は質問責めにあいながら授業を受けた。
だがまぁ運命の日までまだ日はあるだからサボりまくろ。

# 二話

ｓｉｄｅ：日向

数週間が過ぎやっとこの生活に慣れてきた。

今日は戦術機を使った訓練である。使用する機体は、Ｆ―４Ｊ撃震である。

乗ってみた感想は重いだ、例えるならそうだ、インフルにかかった時みたいな重かった。ただ俺の操縦に着いてこれないのかロケットブーストや関節部が大破状態だった。

それで整備士の班長に怒られたなんで。

「おめぇ、どうゆう操縦でこうなるんだよ!?」

「いやー普通に飛んでバレルロールしたり前蹴り、後ろ蹴りや正拳、裏手拳等々しただけです」

そんなことを言ったら整備士の班長のこめかみがピクピク動くとお説教が続いた。

お説教が終わると更衣室で着替えたら寮の部屋に戻りヘッドで寝た。

翌朝

制服に着替えたら部屋から出で道端で買ったパンを食いながら学校の教室に向かって歩いた。

教室に着いたら空いてる席に座って始めるまで、スマホで任務が来てないかメールを見ていら教官が入って来てスマホを締まった。

「今回は、チーム戦を行ってもらう。マップは、市街地で行ってもらう。武装は、ペイント弾薬、７４式近接長刀（模造）を使用すること。各自チームごとに分かれってブリーフィングを始めろ以上解散!!」

チームの人達とブリーフィングをした後、作戦合図と共に前に出た。

１０対１０のチーム戦。

最初は、意外と簡単と思ったけど、思ったよけど当たり判定がおかしい。どこかにペイント弾が一発でも命中すれば撃墜または大破認定になるから、物凄いムリゲーじゃんままあでも対人実戦のレベチが

違うからなと思いながら挑んだ。
俺が囮になるため突撃して右手に長刀と左手に突撃砲と加担システムを駆使しながら撃破しっていった。
俺のチームは俺が突撃して撹乱してる間に大体が撃破、大破認定で残るのは、俺だけだった。悲しいなぁ～。
で、相手チームに残った者は篁　唯依と山城　上総とモブ二人だけで殆どは味方が半分やってくれたけどあの二人だけは、どうしても無理だったらしい。
山城がオープンチャンネルをしてきた。
「投降なさってはどうですか？」
「そりゃ無理だ、申し訳ないけど」
篁もオープンチャンネルを繋いで来た。
「投降してこっちは、二人で貴方は、一人でしょだから・・・」
「あっ、そうなんだ。で、それで、何か問題でも？」
「っ?!戦力差を考えたら・・・まさか、貴方一人で私達を相手するつもり?!」
篁がそう聞いてきた。いや、そうだろだってキラ・ヤマトなんか最初はストライクだけでザフトに奪還されたガンダム４体と戦っていたし、アーマードコアなんて、最大でも二人の傭兵と戦ったけど４体と戦うとなると辛かったなぁ～。
「篁さんもう良いでしょ？あの人は戦況が見えてないのでわ？」
山城が言い終わると山城達は各々武装を向けてきた。その時、俺の頭にとある台詞が浮かんだ。
「ホント好きじゃないんだこうゆう、マジの勝負ってのは」
某主任の真似をして篁達に言ったら、篁達に突撃砲や長刀向けて跳躍ユニットを少しずつ噴射しながらもう一言言った。
「まぁ、やるんなら本気でやろうか！その方が楽しいだろ！ハハハハッ」
跳躍ユニットを噴射しながら匍匐飛行してモブの戦術機に向かった。モブの戦術機が突撃砲や滑空砲を打ってたが俺は、左手持った突撃砲や滑空砲を使ってペイント弾どうしがさをぶつけたりした。

それを見て驚いたのかその隙に二体の戦術機に近づいて、一体は長刀で頭部を破壊とまでは行かないけどもう一体は、突撃砲で管制ユニットの向けてペイント弾を打った。

そしたら後残るのは、篁と山城だの戦術機だけだった。

一体の戦術機が長刀を持って上段から両手で振り下ろしてきたのを右手に持った長刀で受け止めた。鍔迫り合いで段々と押されてきた。長刀を右受け流したら、左手に持った突撃砲を向けた時、その戦術機が長刀を横に振ったら左手に持った突撃砲に当たり飛んでいった。

跳躍ユニットを噴射しながら市街地のマンションの壁まで近づいたら少しジャンプをする時跳躍ユニット少し噴かして壁を蹴り上がった。

それでも長刀を持った戦術機がどんどんと近づいてきた。長刀を相手の戦術機に投げたら、戦術機の右肩に当たり少しよろけた所を加担システムにマウントした突撃砲を撃って、管制ユニットをペイント弾で塗りつぶしたら、二体目の戦術機を目の前した。

後は、あいつだけかさてやるか。

地面に着地したら跳躍ユニットを噴射して匍匐飛行をしながら落ちていた突撃砲を拾い打ちながら2体目の戦術機に少しずつちかづいていった。

俺の勢いに負けたのか管制ユニットをペイント弾で塗りつぶした。

終わりと同時に撃震が膝立ちした。

機体の状況を見ると各部関節と跳躍ユニットが赤くなっていた。

ｓｉｄｅ：篁

相手チームの日向さん一人になった。

この時、負けを認めて投降するかと思ったけど逆に私達を相手すると言ってきた。

無茶だと思ったよけど日向さんは最初に二体の戦術機を一瞬で撃破、大破させた。

そしたら、山城さんが長刀を持って突撃したら逆にやられた。

そして私の目の前に来ると匍匐飛行しながら近づいて来て突撃砲で迎え撃つと複雑な機動をしながら近づいてたら両手に持った突撃砲で管制ユニットをやられた。

実力差的にはそんなないはずだったけど彼の操縦技術は凄かった。

# 三話

ｓｉｄｅ：日向

演習が終わったら整備士の班長に怒鳴られた悲しいな。

午後の訓練のため昼飯買って食おうとしたら俺の名前の呼ぶ声が聞こえて気がしたがそんなことよりどこら辺で飯を食うか迷っていた。

「ひ～く～!!」

まだ今度はどこら辺から声が聞こえたが、気のせいだと思いたい。

「ひゅ～がく～ん、待ってよ～!」

またもや聞こえてきたよ、今度は後ろから声が聞こえたから頭を後ろに向けたらこっちに手を振りながら、俺の方に向かってきた。

「あぁ、あんたらか、何のようだ?」

向かって走って来たのは篁達だった。

「何のようだって、お昼ご飯を一緒に食べたいから、何度も声を掛けても気づいてくらないから・・・」

「あぁ、だから俺の名前を呼んでたんだのか?」

俺がそう言うと篁が苦笑しながらうなずいた。

俺は、少し考えたら右手で頭をかいたら。

「まぁ、昼飯を一緒に食う位なら良いけど?」

そう俺が答えたら篁達は嬉しそな顔をした篁が答えた。

「じゃあ、どこかで食べられる所を一緒に探して良い?」

「良いけどまぁ、とっとと探そうぜ」

俺がそう言うと篁達と昼飯を食べられる場所を探していた。

「あった!あそこにしましょう?」

どこで食べるか篁達と探していたら篁が指を指した所はちょうど空いた学食の席に座って昼飯を食べた後、午前の演習の話を篁達はしていた。

「気になるのがさ、午前の演習で日向君の戦いが気になるらない?」

篁がそう俺に言ってきた。

「なんだ、急に？」
俺がそう言うとメガネを掛けた女子の和泉がなんか言った。
「だって、格闘戦機動しながら射撃を出来るの？」
和泉がそう言うとそれに便乗して志摩子と安芸が（そうよ、そうよ）と言っていた。
いや、実戦経験の差が出てるからでしょ後は、操縦技術の差だけよ後は。
「私は、日向君の攻撃を避けるのに精一杯だったからわよ。だいだい格闘戦しながら射撃する。それも正確な射撃するのがおかしいのよ」
「私もそれは、思った。どうやって操縦したらあんな機動ができるのか知りたいわよ」
篁がそんなことを言ったら全員の目がこっちに向いた。
「それは、言えんすまんが」
「言えないのならしょうがないし、いつか教えてよ」
そう篁が言ったら俺は内心ホッとした。だって俺は、色々と秘密なことあるから言えない。
それから午後の講義が終わり寮に行こうとしたら、スマホにキラからＬＩＮＥ　ｎｅｗが来たからメールの内容を見たらミホが乗るアークエンジェルに乗ってドイツに向かって欲しいのことだった。
俺はため息をついたら、キラ達がいる所に向かった。

# 四話

日向ｓａｉｄ

ドイツに向かってくれとキラからメールが来たから戦艦のドックに向かった。

戦艦のドックに着いたらミホ達が乗るアークエンジェルに乗るため向かって行ったら、途中でキラに会った。

「キラ、もう準備は出来てるのか？」

「うん、後は太陽の機体を積むだけだよ」

「分かった、ありがとう」

俺はキラに感謝の言葉を言ったらミホのアークエンジェルに向かおうとしたらキラが何かを言ってきた。

「太陽、気を付けてあそこで何か起こるか分からないから」

「あぁ、了解した」

キラにそう答えたらミホ達のアークエンジェルに向かって歩いた。

少ししたらミホ達が乗るアークエンジェルの物資の搬入口から入ってブリチに向かって歩いた。

ブリッチに行くエレベーターに乗って上がったら目の前の扉が開いた瞬間にＣＩＣの席に座っていた、そこには多分ショートヘアーで多分茶髪で美人に入ると思う多分の西住まほの顔がこっちに向いた。

「少し遅かったじゃない、太陽」

「ふっ、しょがないだろ色々あったんだからな」

「なら、聞かないことにするわ。後、みほの所に挨拶ぐらいしな」

「へいへい」

そうまほに言ったら艦長席の場所行くとみほは最後の機体の搬入作業の終了と共に発進指示を出してたこら、邪魔になると悪いからお暇してブリッチから出て格納庫の方に歩いた。

やっと格納庫に着いたら、自分の機体のコックピットの所に行きシートに座って、コンソールパネルのキーボードをタイピングして機体のデータを見ていた。

機体のデータ確認をしていたら、軽く鉄を叩いた音がした所をチラ

見をしたらそこには、多分ショートヘアーで多分濃い茶髪だと思うけど、みほがそこに立っていた。
「太陽さん探しましたよ。お姉ちゃんが太陽さんがいると聞いて来ました。」
みほが笑いながらそう俺に言ってきた。
「そっ・・・かで、なんのようだみほ？」
俺はタイピングしながらみほにそう聞いた。データ処理が終わったらキーボードパネルを横に押し上げた。みほは、少し心配な顔をしながら言った。
「これから任務で太陽さんが行く所が心配で・・・で、だからあまり無茶だけはしないで欲しいからかな・・・駄目・・かな？」
「心配せんで良い。もうあんな無茶なことはしないさ。だからあまり心配はするな大丈夫だ。」
みほはそれを聞いたら少し笑顔になったらブリッジの方に向かっていった。
後もう少しでシュプレムベルク要塞陣地塹壕内
ドイツ国家人民軍
第３５自動車化狙撃兵連隊に着くまで１５分後に俺だけの任務開始時間が近いてきた。

ｓａｉｄ：キラ
太陽達がドイツに向かったって数時間経った日に日本の戦術機の不知火壱型と国外の戦術機のデータとガンダムのデータと共に厳谷中佐達と日本帝国の戦術機を作るプランを考えていた。

ｓａｉｄ：日向

東ドイツのシュプレムベルク要塞陣地塹壕に着いたことＢＥＴＡ侵攻をみほから通信連絡がきた。俺はコックピットから出て更衣室の方に向かった。